

人生を しまう時間

とき

監督 下村幸子

プロデューサー 福島広明

撮影 下村幸子

編集 青木観帆 渡辺幸太郎

制作 NHK エンタープライズ

製作 NHK

配給 東風

2019年 日本—110分—DCP

ドキュメンタリー

© NHK

おだやかに、心を寄せて



映画上映会 @文理祭

令和8年10月18日 10時00分 開演

場所：徳島文理大学高松駅キャンパス
ムラサキキネンホール

入場無料



患者と家族と向かい合い、最後の日々をともに過ごす——

小堀鷗一郎医師(80歳)と在宅医療チームに密着した200日の記録

www.jinsei-toki.jp

文部科学省特別選定



人生をしまう時間、 人は、家族は 何を望むのか。

東大病院の名外科医がたどりついた最後の現場 それは、「在宅」の終末期医療だった。

超高齢化が進み、やがて多死時代を迎える日本。近年、国は医療費抑制のため終末期医療の場所を病院から自宅に移す政策をとってきた。同時に、家族に看取られ、穏やかに亡くなっていくことを目指す「在宅死」への関心が高まっている。しかし、家族との関係や経済力など事情はそれぞれ。「理想の最期」の前に、厳しい現実が立ちちはだかることもある。

都会の片隅で、「在宅死」と向き合うベテラン医師がいる。

埼玉県新座市の「堀ノ内病院」に勤める小堀鷗一郎医師、80歳。森鷗外の孫で、東大病院の名外科医だった彼がたどりついた最後の現場が、在宅の終末期医療だった。患者と家族とともに様々な難問に向き合い、奔走する医師や看護師、ケアマネジャーたち。一人ひとりの人生の終わりに、医療に何ができるのか。映画は、地域の在宅医療に携わる人々の活動に密着し、命の現場を記録した。



いま医療に、地域に、社会に何ができるのか？ 大きな反響を呼んだテレビドキュメンタリー、待望の映画化。

本作は、NHK BS1スペシャル「在宅死 “死に際の医療” 200日の記録」に新たなシーンを加え、再編集をほどこした待望の映画化である。「どんな最先端の医療より、人との繋がりや愛情が最も人を癒すのだろう。最後まで目が離せなかった」「いま介護に直面してる人もそうでない人もぜひ見るべき」「在宅死のきれいな事ではない現実に最初は目を背けてしまいそうだったが、家庭ごとにドラマがあり2時間引き込まれた」など、番組は大きな反響を呼び、〈日本医学ジャーナリスト協会賞大賞〉を受賞。自らカメラを回した下村幸子監督は、親密な距離から、いくつもの決定的な瞬間を捉え、命の終焉に立ち会う人々の微妙な感情の動きを映し出していく。

関連書籍のご案内

小堀医師のベストセラー著書
死を生きた人びと
訪問診療医と355人の患者

最後の日々をどう生き、
いかに終えるか。患者に
寄り添い、最期のあり方
を模索する医師の書。

小堀鷗一郎 著
みすず書房 刊
2018年5月1日発行



下村幸子監督の新作
いのちの終いかた
「在宅看取り」一年の記録

本作監督が綴る二人の
訪問診療医と患者たちと
の濃密な時間。取材を通
して見えてきたことは？

下村幸子 著
NHK出版 刊
2019年9月10日発売



www.jinsei-toki.jp fb.com/jinsei.toki @jinsei_toki

令和8年10月18日 開演 10:00 (開場 9:30)

徳島文理大学高松駅キャンパス ムラサキキネンホール

お問合せ先 徳島文理大学香川薬学部 kagawayaku@kph.bunri-u.ac.jp

入場無料